



# 富士の民話 あれこれ

## てなし観音

身延線富士根駅北側の天間川坂地区に、「手無観音」を祭っている観音堂があります。  
今回は、この「手無観音」にまつわるお話について、今もなお観音堂を大切に管理している福泉寺の住職、岡田晨正さんに語っていただきました。



今から四百年くらい昔、室町幕府の第十三代將軍足利義輝の時代のことです。小泉村に川越の喜六という魚どりの好きな人が住んでいました。

喜六は、永禄二年六月十八日の夜に潤井川へ網を仕掛け、魚をとろうとしたのですが、網を引き上げたら、かかっていたのは魚ではなく、十二センチほどの木像の観音様でした。

川を流れている間に取れてしまったのか、観音様の手は二本ともありませんでしたが、ピカピカ光ったその姿は、神々しいほどの美しさでした。

喜六は、不思議に思いながらも、とにかく家へ持って帰ることにしました。天間川坂まで来たとき、喜六は大きな松の根元の石に腰をかけ、観音様を置いて一服しました。

この「手無観音」は、ご利益があるということで、その名が口々に伝えられ、参拝の信者がふえました。そして、手無観音は遠くまで知られるようになり、「駿河・伊豆国二十三観音霊場」の一つとして祭られるようになったのです。毎月十四日に地域の人たちが集まり、お経を上げています。二月と八月の十四日には祭りがあり、特に八月の大祭では、盆踊りなども行われ、大変にぎわいます。昔は、祭りの日に観音堂の前で競馬をしたこともあるんですよ。

岡田 晨正さん (天間)



しばらくして、観音様に手をかけると、観音様は見る見るうちに大きくなりました。びっくりした喜六が両手で動かそうとしても、観音様は重くなってしまう、ビクともしません。

喜六は、「これは、観音様がこの土地に永く住んで、人々を救おうというおぼしめしに違いない」と思い、お堂を建て、観音様を安置したということです。

### こちら編集室

生ビールのおいしい季節になってきた。先日、市民美化運動の一環として、町内の公園清掃に参加した。ふだんカメラより重いものを持ったことがないのに(?)、スコップ片手に側溝掃除。見る見るうちに汗が体中から吹き出る。一緒に作業をしているほかの人は涼しい顔だ。よく考えてみれば、最近、体を動かさないうで、飲んで寝るだけ。これでは体重計の目盛りがふえるのも当たり前。テニスなどで体を動かし、うまいビールをグイッといきたいね。

富士ジュニアフットボールクラブを取材した。富士市の少年サッカーは、県中部に引けをとらないほどレベルアップしていることは知っていたが、昨年の大会で東海四県を制覇したと聞いてびっくり。OBには、清水エスパルスの岩下潤選手や高校選手権で活躍した清商の川口能活選手(現マリノス)もいると聞いてまたまたびっくり。取材中、カメラにVサインをしていたサッカー小僧も数年したらスーパースターになっているかも。サインもらっとけばよかったかな。

広報ふじは環境に優しい再生紙を使っています